



海外交流

## 東欧科学交流のすすめ

室岡 義勝\*

Scientific collaboration with East European countries

Key Words : Hungary, Poland, Czech, Yugoslavia, Slovak

私たち日本の参加者が、初めて顔を合わせたのは、1998年の1月、東京のハンガリー大使館でのDr. Z. Sudy大使ご招待の晩餐会だった。日本・ハンガリー科学事業セミナー仕掛け人の応用物理学専攻の志水隆一先生からの、夫人同伴で参加のことというお達しで、こういった場合は初めての家内共々緊張気味であった。参加者は、阪大から金森順次郎前阪大総長、江尻宏泰核物理センター長ご夫妻、志水教授ご夫妻、辻裕教授ご夫妻と私たちに加え、山村泰道岡山理科大学総合情報学部長、向山毅京大化学研究所教授ご夫妻、村田朋美新日鐵先端技術研究所フェロー、津室隆夫大林組副会長、岩崎恒夫住友商事副社長ご夫妻、日本学術振興会より大崎理事長と岡田課長、およびハンガリー大使ご夫妻を初めとする大使館側出席者であった。

関西ハンガリー協会会長の金森先生を団長に日本代表の9名と奥様方4名は、3月22日ハンガリーの首都ブタペストに集合した。3月末のハンガリーは思った以上に戸外は寒く、早朝や風の日には厚手のコートも突き刺すようだった。セミナーはブタペストの対岸に王宮を望むドナウ河畔のクラシックなハンガリー科学アカデミーの建物で1日間、その後ハンガリー平原を横切って、ルーマニア国境に近い都市デブレツェンに移動し、ハンガリー科学アカデミーのデブレツェンセンターで3日半の「最近の物理学と科学技術に関する二国間セミナー」と物理学研究所およびKossuth大学見学をこなして、夜は科学



写真1 デブレツェンのKossuth大学本部前にて、日本・ハンガリー科学事業セミナー参加者、1998年3月。

アカデミー主催、Kossuth大学長招待、デブレツェン市長招待レセプションおよびオペラ観賞というぎっしり詰まったスケジュールでした。奥様方は、ハンガリー平原で寒風の中馬車を駆ったり、貴腐ワインで有名なトカイワイン工場の見学など楽しんだ。私たちの宿泊に当てられたホテルは、タクシーの運転手も知らない、かつてルーマニアのチェルシエスクも利用していた元共産党幹部の専用宿泊施設だった。林に囲まれて、外からはこのような建物があるなどと想像できない。

さて、この大阪大学を中心とする日本・ハンガリー科学事業セミナーは、今後の両国科学技術の共同研究、科学者交流の第1回目としての役割を担った。今回の参加者は、向山先生のように科学アカデミーデブレツェンセンターに留学され、ハンガリー語を話される人から、ハンガリーからの研究者を受け入れたりあるいはハンガリーと共同事業を行っている企業人といった、いずれも過去にハンガリーと関連の深い人々である。この二国間セミナーを機会に、今後物理学、化学、生物学分野での交流が期待される。

このハンガリーのみならず、東欧諸国は戦前ドイ

\*Yoshikatsu MUROOKA

1942年1月7日生

昭和42年大阪大学大学院工学研究科

修士・醗酵工学専攻修了

現在、大阪大学大学院・工学研究科・

応用生物学専攻、教授、生物工学

国際交流センター長、工学博士、生

物工学

TEL 06-6879-7416

FAX 06-6879-7418

E-Mail murooka@bio.eng.



ツと並んで西洋科学の中心を成していた。私が、東欧を訪れたのは、1986年、共産圏時代の旧ユーゴスラヴィアが初めてである。その後戦火にさらされた現クロアチアのザグレブに降り立ち、機を乗り換えてアドリア海に面した古代ローマ時代から港町として栄えたスプリットに到着した。ユーゴスラヴィアは、昔から発酵学の盛んな国であり、その時開催された国際遺伝子工学会議への参加が目的であった。紺碧の海からみるユーゴスラヴィアの海岸線は、雪山と見間違ふほどの白い砂地の山が聳え、白壁と赤屋根の集落が点在する、どの景色を額に入れても見事な構図と配色になる絵の連続であった。スプリットから200キロばかり乾燥した内陸部に入ったところに、オスマントルコに500年間支配されたモスタールという古都がある。すり減った大理石の階段のある白亜のアーチ橋が街の中心を流れる深い緑の溪流に架かっていた。石畳のあちこちにトルコ風の身なりをした老人が、濃いトルココーヒーをすすりながら、終日飽きることなく座っていた。チト一大統領の治めていた旧ユーゴスラヴィアは傍目にはこの風景のように平和であった。それから、10年を経て、このモスタールの世界に誇る大理石のアーチ橋が無惨に崩れ落ちたタイム誌の報道写真を見て、私は息をのんだ。このサラエボ南部のモスタールはボスニア連邦となった。今日まで続く新ユーゴスラヴィア諸国の内戦のニュースは、あの平和な美しい風景とだぶって私の胸を痛ませている。一体、自由を得た多民族が共存できない原因は何なのであろうか？ 数百年来の民族間の恨みがあるにしろ、また新たな恨みを加算して子孫に伝えていくのであろうか。

会議後、スプリットより夜行列車でザグレブを経て、ハンガリーの国境を越え、17時間かかって、10年来の友人(1970年代に客員研究員として産研に在籍していた)の待つブタベストに着いた。これが私のハンガリーとの出会いである。その後友人は優秀な部下を学生として送ってくれた。その学生は私の研究室で博士課程を終え、英国ケンブリッジ大学の研究員に招かれた。こうした縁で、今回は4度目のハンガリー訪問であった。

共産圏時代のチェコスロバキアは、1988年に訪問する機会を得た。首都プラハは東欧にあって珍しく戦火を免れたため、中世の街並みが残る、しっとりとした街である。ヴォルダヴァ河に架かる彫像の林立するアーチのカレル橋とその対岸の王宮は観光客

でいつも賑わっている。このカレル王により14世紀に創設された現在のプラハ大学の前身カレル(チャールズ)大学は中央ヨーロッパで一番古く、幾多の科学者を生んできた。元阪大総長の赤堀四郎先生も戦前留学されていた。戦前の人にはチェコ式銃がなじみ深いかもしれないが、東欧で唯一自家製の自動車スコダを生産していた。地下鉄の駅名に、酵素の発見者名が使われているほど、チェコの人々は科学の伝統を重んじている。この国は、ユーゴスラヴィアとは違って、平和的にチェコ共和国とスロバク共和国に分離した。以前客員教授として研究室に滞在していた友人が、スロバクの科学アカデミーの研究所で働いていたので、数年前、ポーランドのクラコフより車で山越えして、スロバク共和国を訪ねた。チェコとは対的にこちらは、山の多い美しい農業国であるが、川沿いに点在する工場は排水の垂れ流しであった。プラチスラバの城壁からドナウ河を見下ろすと、オーストリア側の青い流れとは対的に、スロバク側の流れは黒い帯になっていた。友の働く食品研究所はプラチスラバから50km東の葡萄の丘に囲まれたのどかな小都市にあった。所長の自宅の地下で飲んだ。できたてのブドウ酒の味は今も忘れられない。チェコとの分離後、この国は外貨収入がなく、経済の落ち込みが激しくて不自由を強いられているが、それでも、民族独立の自由の方を選択している。

かつての東欧の雄ポーランドを最初に訪れたのは、自由化後最初の年であった。クローン遺伝子提供の縁による、ウッジ大学の教授の招きであった。ウッジはワルシャワから西に車で2時間行ったところにある繊維工業都市であった。西側からの良質の工業製品の流入によって、古い設備の繊維工場は太刀打ちできずほとんど閉鎖していた。ポーランド経済はソビエト連邦への農業製品の輸出により成り立っていたが、ロシア経済崩壊によって、農工業製品の輸出が止まり、安い農産物の輸出は西側の輸入ブロックによって八方ふさがりであった。2年後、日本学術振興会から、八木国夫学術会議副議長を団長に、左右田健次京大教授、岡田学術振興会課長とともに日本側代表として、ポーランド科学アカデミーとの科学技術協定協議のため再びポーランドを訪れた。この協定を基に、毎年交互に二国間セミナーを開催し、1996年には第2回日本-ポーランドバイオテクノロジーセミナーを阪大の銀杏会館において6名の



写真2 第2回目日本-ポーランド二国間バイオテクノロジーセミナー参加者。阪大銀杏会館三和ホール，1996年10月

ポーランド科学者を招いて開催した。以来，研究室には毎年長短期のポーランドからの客員研究者が滞在している。先月，応用生物工学専攻の吉田，卜部教授夫妻と科学アカデミーの招待でウッジ大学，ウッジ工科大学を訪問した。国立のエリート養成期間であった大学は，ご多聞にもれず，今大衆化と独立法人化の道をたどりつつある。このようにポーランドは訪問する度に活気を取り戻し，人々の顔も喜びが増しているように思える。首都ワルシャワはドイツ

軍によって完璧に破壊されたが，かつてウイーンやプラハとともに西欧文化の中心であった古都クラコフは，今も美しい中世の佇まいが保存されている。ここには，カレル大学に続いて2番目に古い歴史を持つ1364年創立のヤギェウオ大学がある。この大学は天文学者コペルニクスを生んだことで有名であり，大学資料館には今も彼の出席簿が残っている。コペルニクスは，ラジュウムを発見者メアリー・キュリー女史とともに，かつての科学の先進国ポーランドの誇りである。

ハンガリー，チェコ共和国，スロバク共和国，ポーランドなどの東欧諸国は，ソビエット影響下50年間の科学の停滞を惜しんでいる。その遅れを一挙に取り戻そうと経済復興と科学振興に邁進している。これら東欧諸国では，西洋科学の伝統と誇りが受け継がれ，科学教育のレベルは高い。現在，学術論文数や引用件数においては世界の15-20位の水準であるが，今こそこの科学教育レベルの高い研究者を受け入れ，学術協力を進めることが将来の日本の科学技術振興にとって有意義であることは疑いない。

